

とりで

村社祐太郎

作品概要（村社祐太郎『とりで』）

失言が看過されやすい場として「家庭」が挙げられるだろう。ある失言、それが一旦社会に晒され、ポリティカル・コレクトネスに照らし合わせてみれば直ちに醜悪で、是正されるべきものと判断され批難されるものであったとしても、一方で看過される場（例えば家庭）に匿われる限りその是非の判断は保留され得る。だから家庭は陰湿だと批判されるのも止む終えない一方で、この保留、そして保留を実現する環境そのものには重要な意義があると考ええる。議論や明示とは違った仕方で、失言を取り囲む各々の認識のさまさまを（部分的かつ劇的に）転倒させる契機になり得るからだ。挙げようと思えばいくらかでも挙げられる徴（しるし）をどういった範疇で加味し出来事を解釈するかは、当然恣意性に委ねられている。ただそれでも失言の判断を保留しつつ家庭が持続するのであれば、そこには忍耐や悔い、恥や祈り、執着や思い込みを経由して、水面下で認識の変遷が日夜蠢いているからだと考えることはできないだろうか。もちろんこれは短い文章で扱うには危険な論旨ではある（とはいえ家庭-会話-失言-保留という一本の系に限って書く配慮はした）。以上がいま家庭の風景を描く理由である。

また作中にはアルコール性認知症の陰りを書き込んだ。アルコール依存症をはじめとする物質依存／嗜癖行動はある種その保留の質を問う病だ。言明が必要以上に避けられることで、家庭内の関係性に軋みが生じる。保留は、認識の転倒に対して常に有効なわけではない。その当たり前のことも書き示したかった。

『とりで』（二場） 村社祐太朗

登場人物（年齢は一場時点）

奏見よう子（62）

奏見藤子（28）・・・よう子の第二子長女

林秀真（34）・・・よう子の第一子長男

林由利（34）・・・秀真の妻

林侑斗（6）・・・秀真／由利の第一子長男

林真帆（2）・・・秀真／由利の第二子長女

林貴雄（65）・・・よう子の元夫

（左記の年齢は二場時点）

浜屋尚己（30）・・・藤子の彼氏

第一場

晩夏。葛飾区の狭小住宅の前庭。シナヒイラギの生垣が通りの目を遮っている。窓が開け放たれていて、板の間にはキャンプ用のローテーブルがある。

よう子が板の間に座り、窓の外に足を投げ出している。竹ざるを膝の上に立てて、その網目を見たり庭に目をやったりしている。

藤子が、くず餅の入ったガラスの小鉢を両手に持って奥からやってくる。

藤子 はい。前にさ、シンクが汚れにくくなる薬のこと話してたよね。

よう子 薬？ ああ。

藤子 ワックスか。シンク全体に塗って何時間か置くと、水垢がすぐにはつかなくなるっていうワックスの話してたでしょう。

よう子 うん。

藤子 あれは今使ってないんだ。

よう子 え？ どうして？

藤子 シンクが大分汚れてるから。

よう子 嘘、汚れてる？

藤子 いやちよつとね。

よう子 カレイの血かな。

藤子 血か。汚れがもう少し赤茶けてるから、掃除をしてないんじゃないかってむしろキッチンを長く使ってないのかなと思ってさ。ちよつとぎよつとしちゃった。

よう子 昨日は気を失うように寝たからさ。

藤子 カレイは何にしたの？

よう子 煮付け。

藤子 へえ。ご飯は食べた？

よう子 少しだけ。カレイが煮立ってから、最後にほうれん草を二束切って、脇に突っ込んだじゃえね、それで野菜も摂れるから楽だよ。

藤子 美味しそうだなあ。お母さんさ、食べる専門の方になると、これまでそうなかったでしょう。

よう子 食べる専門。子供るときはそうだよね。

藤子 子供のときを抜いたら。

よう子 あるよ他にも。お父さんは若い時によく料理したし、あと秀が高校生のとき、家のご飯全部作るって言ったことがあったでしょう。

藤子 覚えてないな。

よう子 理由は訊かなかったからよく分からなかったけど、それでも2ヶ月続いて、ある日からまた食べる専門の方に戻った。

藤子 なんだよ。

よう子 なんだっけな。おからハンバーグだっけな。すごく美味しくて、みんなで感想を言い合うようなメニューがいくつかあったんだよ。あれが羨ましかった。

藤子 (眉間に皺を寄せて頷く) へえ。

よう子 片付けはね、昨日はお酒入ってたから後回しにしちゃった。

鳥が二羽、立て続けに庭に降り立つ。

ほんの一瞬で少しの収穫を得て、鳥が二羽とも飛び立つ。

藤子は鳥が羽ばたく時、避けるように身体を折る。

藤子 またお酒飲んでるの。

よう子 昨日はたまたま。

藤子 やめたんじゃないかなかったの。

よう子 本当にたまたまだよ。久しぶりに。

藤子 心配だなあ。

よう子 秀は何時だっけ。

藤子 もうそろそろくるんじゃない。サエキさんにだけ寄ってくるって言ってたけど。

よう子 何しに？

藤子 なんだろう。新車買おうと思ってるのかな。

よう子 新車？ 中古車屋で？

藤子 いや、買い換えようと思ってるのか。秀の車って結構古くて、BEETLEの子のスピーカーが自前で天井につけてあるんだよ。

よう子 でも車持ったのってつい最近じゃなかったっけ。

藤子 一昨年じゃない？ 真帆が生まれるっていつて買ったんじゃないかったっけ。

よう子 中古だったってこと？

藤子 そうそう。

ガラスの小鉢が空く。

藤子 たまに食べると美味しいよね。

よう子 うん。

藤子 お母さん船橋屋のしか食べないよね？

よう子 えっと。コンビニやスーパーで買うときもあるよ。

藤子 ああそうなんだ。

間

よう子 あ、栗も茹でてあるけど、食べない？

藤子 栗。

よう子 (立ち上がって竹ザルを手に奥へ向かう) 先週くらいからスーパーに並び始めて、最初に見つけたときは迷わず買ったよ。

藤子 栗は、買ったことないな。

よう子 そう。わたしは買ってくるどぎつとまとめて茹でて、冷蔵庫にいれておく。多分2回くらい買い足すよ、ひと秋に。

藤子 へえ。私が居た頃はそんな習慣なかったよね。

よう子 ぱっと口に運べるものがあると、ああ用意しておいてよかったって思うの。先月はそれがこんにくやくゼリーの凍らしたやつだったんだけど、涼しい日が増えてきたから栗に変えたわけ。多分順繰りに、今後も、なにか試すと思う。

藤子 そう。

よう子 そうだ。

玄関（引き戸）の開く音が聞こえ、よう子が口にした「そうだ」がやり過ぎられる。続けて秀真の声が奥からする。

秀真 お邪魔します。

藤子 きたきた。（立ち上がって奥へ消える）

間。

秀真が奥からやってくる。

秀真 どうも。どう調子は？

よう子 久しぶりだね。おかげさまで、変わりなく。

秀真 由利がこの間の鍋、ありがとうございますって。

よう子 ああ。趣味合えばいいけど。

秀真 やたらね、煮物が増えた気がする。最近。

よう子 本当に？ あはは。それはよく分かる。なんか取り回しがきくんだよね。見た目より少し軽い感じがして。

秀真 結構使ってるんだと思うよ。あれって匂いがつかないんでしょ。よう子 まあ比較的ね。あの鍋の行き場所があったよ。きいてみるもんだね。

秀真 そっか。確かに。わかんないもんだね。

よう子 本当。

秀真（腰掛けて）その部屋、いつまで空っぽにしておくの。

よう子 ああ。でも不使してないから。

秀真 テーブルひとつないんじや、誰か来てもゆっくり話せないだろ。

よう子 いや、これで十分（キャプテンスタッグのローテーブルに触れて）。誰がきてもここに案内するから、案外事足りるんだよ。

秀真 そっか。

よう子 多田さんなんて、三時間位話していくよ。

秀真 ああそう。多田さん仕事はしてないんだ。

よう子 母親の介護があるからね。月の半分は施設で寝泊まりするらしいんだけど、残りの半分は彼女が、食事は準備しなきゃならぬみたい。

秀真 ああそう。

よう子（庭のベンチを示して）あそこに二人で座ることもあるよ。そのときもこれを持っていつて、お茶菓子なんか置いてね。

秀真 ああ良さそうだね。

よう子 この頃は、虫がよく鳴くようになって。話すことはたくさんあるんだけど、だけど一方で間も持つ。私は読書をして、彼女はPSPをやって、なんてときもあるし。

秀真 へえ。PSPか。

よう子 あるでしょ？（携帯ゲーム機を操作するジェスチャー）

秀真 うん。

間。

秀真 うち、あそこ川沿いでしょう。それで騒音が少ないのか、4階でも結構聞こえるよ、虫の音が。下は駐輪場なんだけど、住人がぐるっと回れるようにちよつとした緑道になってるっていうのもあって。結構聞こえるね確かに。言われてみるとそうだ。

間。

秀真 (庭の方を手で示して) ちよつと座ってみてよ。

よう子 どうして。

秀真 いや見てみたくて。

よう子は立ち上がって歩き、下手に消える。

秀真 (笑って) 庭があるの、やっぱりいいね。

よう子 …。

秀真 (少しぎよつとして、庭の方を指差す) それは？

よう子 コブシ。

秀真 そんな立派なの、植わってたっけ。

よう子 年末に植えたのよ。

秀真 そうなの？ ひとりでやったの。

よう子 コーナンの人が手伝ってくれた。

秀真 そうなの？

よう子 好意だね。多分。

秀真 へえ。

藤子がガラスの小鉢を持って戻ってくる。

藤子 なにやってるの。

秀真 庭に、藤子は何か植えないの。

藤子 どうして。

秀真 せっかくあるから。

藤子 でも手入れがね。

秀真 いまも親父が来てやってるんでしょ？

藤子 そうなんだって。これ船橋屋のくず餅ね。

秀真 ありがとう。

藤子 草をまだ巻ってるんだって。(よう子に) 蚊いないの。

よう子 いるよ。

秀真 じゃあ、あのカートまだ現役なんだ。そうだ、失礼ちよつと車に忘れ物した。

秀真が立ち上がって奥へ消える。

よう子が剪定バサミ片手に戻ってくる。

藤子 一人だったね。

よう子 ねえ。

藤子 お母さんが「大事な話がある」なんて言ったから、秀真も気を遣ったんじゃないかな。

よう子 そうかな。

藤子 わたしだってメールがきて、まず「どういう顔して行ったらいいんだろう」って思ったよ。

よう子 そうか。

間

よう子 ごめんごめん。誤解を招いたなら。

藤子 まあ。

よう子 多分大した話じゃない。ただまとめて話さないと、二人にちやんと考えてもらえないんじゃないかと思って。

藤子 どういうこと？

玄関が開いて閉まる音がする。間。

よう子 (息を長く吐く)

秀真 これ、由利がお返しだって。

よう子 いいのに。(紙袋を受け取って透かして中を見る) ああ、流石は由利さんね。わたしもこの白雪ふきんをもうずっと使ってるの。

秀真 前にその話をしたんだって言ってたよ。

よう子 あそう？ ああ氣遣わせちゃって、申し訳ない。ありがとう。

秀真 (頷く)

よう子 (藤子に) これすごく持つんだよ。藤子も使ったら、多分びっくりするよ。

藤子 へえ。

三人並んで板の間に座る。

藤子 あれそうだ、物干しは？

よう子 そう物干しね、処分したの。今は二階に干せば間に合うから。

藤子 わざわざあれ、捨てたの？

よう子 (頷く)

秀真 捨てられるんだね。

よう子 それに、この庭がぼっかり開いてると、気分がいいんだよね。

藤子 はあ。

よう子 あとお母さんこの家でね、犬を飼うことにしたの。

藤子 犬。そうなの？

よう子 そう。それが大事な話。

藤子 そうなの？

秀真 はは。犬を飼うなんてずいぶん唐突だね。ただまあ氣持ちは分かるよ。

藤子 なんでよ。

秀真 この家は広すぎるよね。

よう子 そう？

秀真 物も一向に増えないし。

よう子 そうか。

藤子 寂しくて犬を飼うの？

よう子 違う違う。日垣さんが来月、堀切の都営に引っ越すんだけど、そこではペットを飼えないらしいの。それでこの間、私しか頼る人がいない。話を聞いてって言われて。マルオっていう子なんだけど、マルオのことは前から知ってたし、比較的落ち着いた子だし、結構真面目に考えてみて。まあ飼ってみようかなと思って、この際。そういうひよんな話なの。どう思う？

藤子 どう思うってもう決めたんでしょう。返事もしたんでしょう。

よう子 うん。

藤子 何犬なの？

よう子 ミニチュアシュナウザー。写真みせようか。

よう子はスマートフォンを少し操作してから秀真に渡す。

よう子 4歳になったばかりらしい。日垣さん、知らない人の手に行ってしまうのはちょっと、なんて言うんだよ。

秀真 なんでもそんな思い詰めてるの。

よう子 え、思い詰めてる？

秀真 (頷く)

藤子 (スマートフォンを受けとって) この子か。かわいい。白い。

よう子 私はいつまで飼えるのかなと思って。

秀真 泣いてるの。

よう子 泣いてはないけど、七十五になったら、わたし大丈夫なのか
など思ってる。

秀真 ああ、考えてもみなかったな。母さんが何かできなくなるなんて。
て。

藤子 …。

よう子 いいよ飼うようちでって返事した日から、北砂でリハビリして
る場面を夢にみるようになって。びっくりしたよ。

藤子 なんか、単純じゃない。

秀真 それはどんな場面なの。

よう子 スーパーに行ってるプログラムで、退院するもう数日前なの。
渡されたメモ用紙にバターロール、食器用洗剤、鉛筆って書いてあ
って、一人でそれを買って揃えて病院に戻らなくちゃいけないん
だけど、鉛筆がどうしても見つからない。結構長い時間探すんだけ
ど。で、リハビリの先生に肩を叩かれて「終了です」って言われる。
でもその人が誰だか一瞬分からなくてっていうところで起きる。

秀真 (頷く)

藤子 それ実際にやってたよね確か。

よう子 そうそう。でも「終了です」って言い方ではなかったような

気がする。

藤子 (笑って) ショックだったって随分言ってたよね。

よう子 見つからないんだもんだった。

藤子 でも今は買えるでしょう。

よう子 多分ね。

秀真 そのマルオはいつ来るの？

よう子 明日。

秀真 明日！ じゃあまた明日来ようかな。何時くらい？

よう子 日垣さんたちは、二時にいらっしやるって言ってたかな。

秀真 じゃあ侑斗と真帆も連れてくるよ。

よう子 由利さんも用事なかったら。

秀真 どうか。明日は自由な日だから。

秀真は立ち上がり、空いた小鉢を持って奥へ消える。

藤子 何かあったら頼ってね。

よう子 ありがとう。

幕

第二場

第一場から5年後の梅雨。

生垣の一部が門戸に置き換わっている。

シナヒイラギの生垣の間から、二箇所、青い紫陽花が顔をのぞかせている。

18時でまだ外は明るく、庭の自動点灯式のライトは点いていない。

浜屋がここに置いて行った手土産と荷物は唐揚げ、マルセイバターサンド、エトボスのトナー、ユニクロの新商品パンフレット、手製のアスパラの浅漬け、チューブパウチ入りの塩麴。

よう子は庭に降り立っている。板の間に対して斜になっており、板の間には青みがかったガラスのカラフェが置いてある。由利が部屋の奥に現れて、よう子に近づく。

由利 このお部屋より、屋上の方が人の手が入ってるみたいです
ね。

よう子 そう？

由利 違うんですか？

よう子 どうだろう。先週あの人 came ときは、その下生えを整えてたよ。

由利 あの桔梗が植わってるところ。

よう子 どうだろう。

由利 確かに、切りそろえてありますね。

よう子 2時間くらいやってたんだね。小雨が降ってたのにさ。

由利 何か話したんですか。
よう子 そうだね。

間

よう子 マルオのことを話したら、結構寂しがってた。

由利 そうですよ。

よう子 でも数えられるくらいしか会ってないと思うんだけど。

由利 そうですか。どんなふうだったんですか。

よう子 (由利の目を覗き込んで) 普通だよ。寂しくなるな。私に、やることなくなるんじゃないか、とか。あとマルオのリードは、あの人が買ってくれたものだから一応必要かどうか聞いて、驚くべきことに持って帰って使うって言うから。それで今日リードを付け替えなくちゃならなくなったの。

由利 ああ。

よう子 テレビ台に置いてあるでしょう。

由利 (部屋を振り返って) ∴。新しいのは、何色でしたっけ。

よう子 それみたいに地味なやつじゃなくて、なんていうかな。

由利 籐子ちゃんが選んだんですかね。

よう子 きつとそうじゃない。

由利 あんまり気にしてなかった。

よう子 良く似合ってたしね。

由利 このグレーも良かったですよ。

よう子 そう、本当に何かに使えるのかな、そういうのって。

由利 なんですかね。

配達員 こんにちは。

門戸の前に佐川急便の配達員が立っている。

よう子 ああ、ありがとうございます。

よう子は門戸に近づいていくが、歩みはゆったりしている。

配達員 サインはいららないで。(小包をよう子に渡して) ありがとうございます。

よう子 お世話様です。

よう子はまた、同じくらい緩慢な歩みで軒先に戻る。

由利 秘密なんですか。

よう子 いやそんなことないよ。これは上等な明太子。

由利 しまいますね。

よう子 ありがとうございます。

由利 (部屋の奥に消え、また戻ってくる) そうじゃなくて。リードの使い道ですよ。

よう子 私は、訊かなかったからなあ。

由利 今度会ったら教えてもらおう。

よう子 由利さんは日曜日お休み？

由利 はい。

よう子 明後日は昼ごはんを食べにくるらしい。よかったら来たい。

由利 はい。嬉しい。侑斗の教室が終わったらその足で寄りますね。13時には着きます。

よう子 スケートボードの教室？

由利 はい。オリンピック選手になる予定の。

よう子 あはは。

由利 江戸川駅のすぐ側なんです。行きは秀くんが送ってくれてます。

よう子 ああ、そう。

由利 誘ってみますね。昼ごはん行くけどって。

よう子 ぜひそうしてください。

問

容子は板の間に腰掛け、カラフェを手に取りグラスに水を注ぎ、水を飲む。

由利 もらったマルセイバターサンド、食べましょうか。

よう子 ええ。

由利 (奥の部屋から) どうしてマルセイバターサンドなんだろ。

よう子 アンテナショップで買ったんだそう。亀戸にアンテナショップがあるって言うんだけど本当かな？

由利 そうでしたっけ。

よう子 彼は、特別ああいうところ好きなんだと思う。

問

よう子 コスメとかお惣菜、ユニクロとかが一堂に会している場所がさ。

由利 この塩麴は？

よう子 それは浜屋くんのだって。

由利 このタッパはなんですか。

よう子 それはアスパラの浅漬けだって。

由利 アスパラの。

よう子 それも頂きましょう。それは私に作ってきてくれたの。

由利 す、すごい。黄色いお皿に出しますね。

よう子 うん。

よう子は顔の前で手を振り羽虫を避ける。また大きく鼻で吸って周りの臭いを嗅ぐ。

薄手の綿のスカートで膝までたくし上げて膝裏を搔く。ただ視線はぼうっと庭の中ごろに落ちている。

由利が黄色い皿と直径10cmほどのシャーレを手に、軒先にやってくる。

由利 どうぞ。

よう子 すいません。

由利は、置いた皿を挟んでよう子の隣に座る。

よう子は刺してあった楊枝をつまみ、アスパラを口に運ぶ。

よう子 美味しい。

由利 ああ美味しい。

問

由利 真帆も、スケートボードをやりたいって言うんです。

よう子 ああ。

由利 怖くないんですね。

よう子 (頷く)

由利 結構高いんですよ。子供用とはいえ、登るところは。生垣くらいの高さです。

よう子 それは、勇気あるね。

由利 そうですよ。

よう子 結構やってるんですか、女の子も。

由利 1年生はいなかったですけど、4年生くらいになると本当に半々なんですよ。

よう子 ああ本当に。

問

由利 藤子ちゃんは、秀くんを真似ましたか。

よう子 そうね、何ってことはないんだけど真似る真似る。水着を入れる袋とか。衣装ケースの蓋のある無しとか。あとは、布団に入るまでにやることとか。

由利 (頷いている)

よう子 あとね、初めて屋にカップラーメンを食べたことがあったんだけどね。町内会の運動会でもらったカップラーメン。あるんだから食べようっていうことになって、お湯を入れたの。そしたら藤子が秀の塩の方、青い方が良い匂いがするって泣き出したの。箸がからから落ちて、わたしは嫌味っぽくため息したんだけど、秀が取り皿を4枚出して解決っていうことがあった。なんの話でしたっけ。

由利 もとの藤子ちゃんのは、醤油味ですか。

よう子 いやカレーだった。

藤子 (奥から) ただいま。

よう子 おかえり。

藤子が奥の部屋に現れる。

藤子 ただいま。

由利 藤子ちゃん、この間大丈夫だった？

藤子 由利さん、本当に急な話でしたよね。

由利 私達はありがたかったよ。

よう子 藤子、浜屋さんは散歩に出てるよ。

藤子 そう。

由利 侑斗たちも連れて出てくれたの。

藤子 そうか。彼らはどうも波長が合ってますね。

よう子 大分懐いてるのね。

藤子 二、三遊ぶ機会があったんですよね。今朝も二人に会うのが楽しみだ、なんて言っていて可笑しかった。

由利 侑斗はあの日を境にお風呂に凝ってて、いま入浴剤を買い集めてる。法典の湯に入ったあとは、脚が速くなったり、目が良くなったりしたって言うの。

藤子 あはは。

由利 二、三日そう。

よう子 私も誘ってくればよかったのに。

藤子 だからね、あの日お教室の日だったんだよ。

よう子 ああ。

藤子 もう懐かしいでしょう。お母さんたち別に住んでからは行ってないんじゃない。

よう子 それでも二、三回は行ったと思う。秀が連れて行ってくれたこともあったね。

由利 ああ、ありましたね。

藤子は板の間に腰を下ろしている。

藤子 お父さん、マルオのこと何か言ってた？

よう子 特別な。でもお父さんも寂しがってて意外だった。

藤子 そっか。

由利 ごめんね。うちだったら近くて、今まで通り会えただろうに。

藤子 そんなあ。わたしだって為されるがままなんです。尚さんがマルオにこうも心酔するとは思わず。

由利 うん。

藤子 そうですね。そうですね。と言っているうちにこの通りですよ。

よう子 リード良いね。似合ってたよ。

藤子 気に入ってくれればいいんだけどなあ。この一週間、根詰めを選んでんです。

由利 なんの柄なの？

藤子 あれは幾何学模様になった貝なんです。

由利 貝。へえ貝か。可愛いね。

藤子 聞きました？ あのリード、一昨日からここに泊まらせてたんですよ。

由利 へえ。

藤子 マルオはこだわりがあるので、前もポウルを替えた時、半日くらいご飯食べなかつたんだよね。

よう子 そう。

藤子 リードとなると、また相当シビアだと思う。

由利 それで、この家の匂いを吸わせておいたんですね。

藤子 そうです。

よう子 大丈夫よ。浜屋さんのことも信頼しているようだったし。

彼は本当に優しそうな人だし。

藤子 優しい。人にも、動物にも。

由利 みて、浜屋さんがお義母さんに作ってきたそうだよ。

藤子 え。

由利 浅漬けだよ。

藤子 へえ美味しそう。

よう子 どうぞ。

よう子の手差しを待たず、藤子はアスバラに手を伸ばす。

由利は立ち上がり部屋の奥へ向かう。

藤子のスマートフォンが鳴る。

よう子 お父さん、来週も昼ごはん食べに来るって。

藤子 そう。

間

藤子 お教室は、口数増やせるって？

よう子 きいてない。少し気が引けるんだもん。

由利 (お茶の入ったグラスを両手に奥から戻ってきて) お義母さん、お茶いただきました。

よう子 はい。

藤子 ありがとうございます。

よう子 月に2回通えない人もいるのに、私たちの提案はかなり身

勝手でしょう。もう菊まつりに向けてグループ分けも済んでしまっ

て、言い出すタイミングがそもそもないよ。ありがとう(由利がよ

う子のグラスに水を注いだ)。

藤子 だからね、押田さんが区の担当の人に説明してくれたんだっ

てば。向こうも気を遣って、お母さんから先生に直接相談してから

話を通しますって待ってくれてるんでしょう。

よう子 ああそう。

由利 藤子ちゃん、これも浜屋さんがくれたんだよ。

藤子 マルセイバターサンド? どこで買ったんだろう。

よう子 もう少し考えさせてよ。

藤子 (マルセイバターサンドを食べながら) 尚さんがうんちの袋

忘れたらしいから持っていく。

由利 わたしが行こうか。

藤子 大丈夫です。今パンダ公園だって。

藤子は立ち上がって、奥へ消える。

よう子 正直ね、マルオのケージとか、片付けなきゃならないもの

はたくさんあって、向こう一ヶ月は暇じゃないんだよね。

間

由利 お義父さんもここに住めばいいのにつて、私なんかは思いま
す。

よう子 マルオの次は、貴雄ね。

由利 あはは。

よう子 藤子は正しいこと言わせると強いんですよ。もう何年も
前、順天の先生に色々言われたことがまるで餅しているみたい。何
もなくたって、この歳になれば癖みの一つ増えると思うけど。

由利 そうなんですか。

よう子 そんなことないよね。

由利 はい。

よう子 ありがとう。

由利 接木を教わっているなんて、そうそうあることじゃないです
よ。

よう子 あはは。

由利 そう思いませんか。

よう子 秀は調子、どうなんですか。

由利 いま洗濯はやってもらってます。洗って干して、取り込むと
ころまでがやっつとです。

よう子 そうですか。

間

庭のライトが点いている。

隣家の水撒きの音が聞こえる。

よう子 一度、私をキャンプに連れて行ってくださいよ。

由利 キャンプですか。

侑斗 (部屋の奥から) お母さん靴濡れた!

由利 帰ってきましたね。(立ち上がった) 待って待って。

由利が小走りで奥へ消える。

よう子は手を板の間につけてから、また庭に立つ。
門戸の方から犬の唸る声がする。

よう子 マルオ。

了